

# 「木工芸・漆芸の地場産業を活用したパブリックアートの研究」における報告

人間総合科学研究科芸術系 宮原 克人

## はじめに：

木と漆を素材とした制作研究を行なっている。工作センターとは、縁もなさそうな研究なのだが、機械工作とガラス工作の両方でお世話になって久しい。制作に関する相談や実際の制作依頼のほかには、工作部門の技術をひとつの素材として捉え、作品化するような試みも行なっている。

## Leaf Clock：

2010長野県塩尻市の市街地再開発事業の一環として、図書館を核とした「市民交流センター」が建設された。塩尻市は、特産のぶどうが生み出すワインの生産地として有名である。また、木曾漆器を生産する漆器産地でもある。

木曾漆器工業協同組合より「漆を使ったなにかを作る提案」はできないか、という依頼を受けた。漆を市民交流センターに取り入れたいとの願いであった。漆器生産に携わる技術者の持つ、伝統技術を現在の空間に活かす事を実現するため、共同研究「木工芸・漆芸の地場産業を活用したパブリックアートの研究」が始まった。



塩尻市市民交流センターの建設風景  
97本の壁柱が特徴的、地下1階・地上5階建てのビル。市立図書館を核に、子育て支援センターや市民会議室、オフィス、カフェが入る。  
設計・コンテンポラリーズ



壁柱が立つ

漆器と言えば、お椀や重箱などが思い付くだろう。漆器が伝統的な工芸品であることは確かなのだが、造形素材としての漆は、様々な可能性を持っている。現代の建築空間にどのようにアプローチして漆の良さを活かす事ができるか、ということがデザインをする上で大きな課題となった。また、



葉をイメージした時計の針のスケッチ



種をイメージした文字盤のスケッチ

実際に制作する漆芸の技術者にとっても大きな刺激となるようなプランを用意した。

これは、時計の針と文字盤のアイデアスケッチの一部である。針の動きが葉の成長をイメージさせ、時の成果物として種を落とす。そしてそれが循環するというストーリーを考え、図書館の顔となるような直径4mの大型の時計制作を計画した。

Leaf Clockと名付けた時計は、正確な時間を示す時計本来の役割よりも、時間の流れを表現することを大切に考えた。本の中の物語は、過去や未来を自由に行き来する。慌ただしい日常のなか、図書館の中では、本の中の時間に浸って欲しいとの思いもあった。そして、建築の特徴的な壁柱と開放的な空間と共存するデザインとした。

時針と分針の進行により、様々な表情が生まれる「動く彫刻としての時計」というコンセプトをたてた。そして、針が空間にせり出す時計とした。

これまで、木工と漆芸を素材とした制作研究を主としてきた身にとって、時計を作るということはもちろん初めてである。セイコータイムシステム株式会社に機械部の設計と制作を依頼した。壁柱が構造の役目を果たすため、通常は隠れる機械部が露出する事になる。数回にわたる設計から小型の機械部が実現し、漆の彫刻で覆った。

時針と分針は、興福寺の阿修羅像の制作方法として知られる「乾漆」技法を応用して、軽くて強い針を目指した。それぞれの針の質量は6kg以内、片持量0.5kg・mという指定があった。

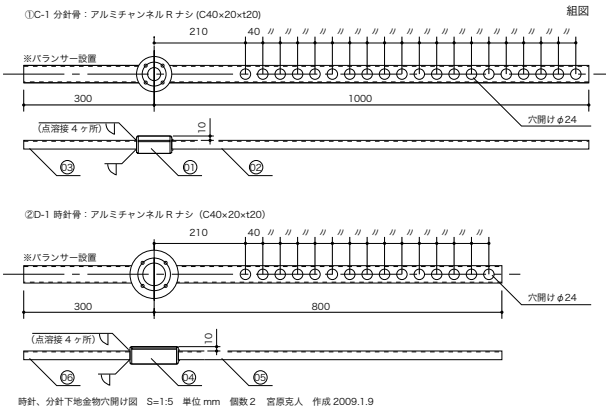
時針と分針の形体は、実際に作りながら決定するため、針の針となるアルミ金物の制作と共に進める必要があった。工作部門にアルミ金物の製作を依頼し、片持量を確かめながら針の造形を行なった。そして、様々な問題をクリアーしながら完成に至った。工作部門の存在により、造形性と機能をあわせ持つ時計の針が実現した。



木で作られた1:10の模型



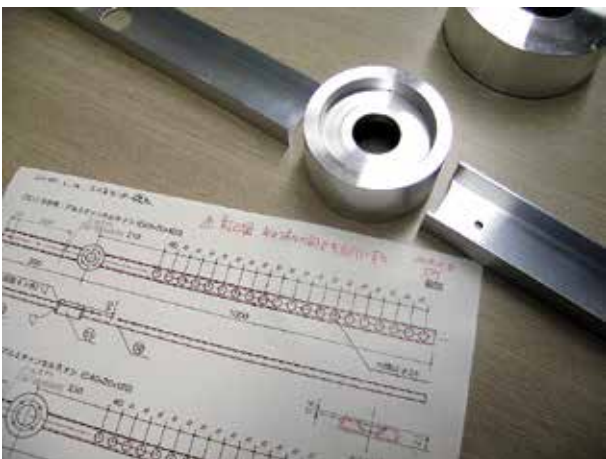
研究室での制作



時針・分針の図面



種 (1:1) の模型



工作部門での打合せ

工作センターで制作された針の芯に、発砲ウレタンを接着し、切削しながら成形した。これを木曾漆器工業協同組合の技術者へ届けた。麻布を数枚、漆により張り合わせる乾漆技法で強度を持たせ、黒呂色仕上げで完成された。漆独特の透明感のある黒に仕上がった。種は、原寸大の模型を制作し、ヒノキで制作された。針以外の種や機械部を覆うカバーには、螺鈿や卵殻等の伝統的な技法も取り入れ、漆芸の技術者達の力が存分に発揮された。



漆で仕上げた時計の針



文字盤の種



3階から見る時計



取付け工事



1階から見上げる時計

### 素材としての工作センター

次に紹介するのは、工作部門でガラスの部屋を見学した事がきっかけとなって制作した作品の事例である。特殊な試験管等が陳列されているのを見てから、いつか自身の作品に取り入れたいと思っていた。工作部門の技術力をひとつの造形の素材として捉え、作品を制作し発表した。

### 花の咲く場所 Calla：

「常総市まちなか展2010」に参加した作品「花の咲く場所 Calla」は、五木宋レンガ蔵で発表した。蔵に作品を展示する事で、蔵の放つ独特な空気感を可視化したいと考えた。カラーの彫刻が浮いて存在するような、ガラスのフラワーベースの制作を依頼した。



花の咲く場所 Calla

### A Faraway Sun 遠い太陽：

「会津・漆の芸術祭2012」の作品では、ガラスの加工にメッキの技法を取り入れた。二十間もの大きな蔵の空間で、インスタレーションの手法を用いて表現した。

筆者と逢坂卓郎\*は展示会場を探す中、喜多方市の二十間蔵で発表する事を決めた。二十間蔵は酒

蔵としての役目を終え、様々な使用方法が試みられている。

逢坂は蔵の美しい梁や天井に設置された漆の作品を照らしながら、用意された7分のプログラムによって様々な光を演出する。

床面に置かれた筆者の作品は、その光のなかにある。中央に葉を散らした。周辺に7個配されたガラスによるオブジェは、内側にメッキ加工がされており天井からの光を映す。どこにいても光を映すように作られたガラスのオブジェは、それ自身が発光しているかのような、不思議な魅力を持つ。円錐形が広がった皿の部分には、漆の種を漆で接着しながら積み上げた。

「会津・漆の芸術祭2012」は福島県立博物館が起点となり開催された。2010から開催され、2012年は「地の記憶 未来へ」というサブタイトルを持つ。

会津地方と漆の関わりは、分かっているだけでも2400年の歴史がある。漆の芸術祭では、漆を工芸の素材としてではなく、人々の暮らしと共にあった「生きた文化資源」の象徴として捉え、様々な取り組みが行なわれた。

喜多方地方には、今も多くの蔵が残る。その中でも二十間蔵は、非常にきれいな構造を持つ蔵である。酒造であった二十間蔵は、喜多方の豊かな自然と伝統を背景としたもの作りの場であった。

そのような地域資源に光を当て、芸術的アプローチから地域文化を見直すことを試みた。そして、震災後に私達が置かれている状況や目指すべき方向について、自然との関わりについて、自らに問いかける作品でもある。

\*逢坂卓郎 人間総合科学研究科芸術系教授

作品「Molt 脱皮」

工作ニュースNo.4において「宇宙芸術“Spiral Top-II”の制作と国際宇宙ステーションに於ける実験報告」を掲載。



逢坂卓郎 Molt × 宮原克人 A Faraway Sun  
葉の作品を約650個制作し、床に配した。

撮影：村上史明



変化する光に硝子の作品が浮かび上がる。 撮影：村上史明



漆の種を積んだガラスの作品

撮影：村上史明



床の置かれた640枚の葉。  
マテバシイの落ち葉を加工して、漆と錫粉で仕上げた。

### おわりに：

物が作られる場の発する空気感とでもいおうか、期待感とでもいおうか。物が作りだされる場にいるだけでワクワクする。私が生まれ育った環境も関係しているかもしれない。漆職人の祖父と母は、いつも土蔵の仕事場にいた。

今回紹介した研究については、工作部門の技術力を有効に活用した事例とは言えないかもしれない。しかし、今後も大学内にこのような施設がある事に感謝しながら研究に励みたい。

### 作品

#### Leaf Clock：

木曽漆器工業協同組合との共同研究「木工芸・漆芸の地場産業を活用したパブリックアートの研究」

漆芸による制作：木曽漆器工業協同組合

デザイン・制作：宮原克人研究室

時計・分針加工：筑波大学研究基盤総合センター  
工作部門

機械部製作：セイコータイムシステム株式会社

H400×W400×D60cm、塩尻市市民交流センター  
設置、2010.8

#### 花の咲く場所 Calla：

木彫・乾漆・ガラス（工作部門）、H150×W70×  
D70cm「常総市まちなか展2010 かさなりあう色」  
常総市五木宋レンガ蔵、2010.10.16-31

#### A Faraway Sun 遠い太陽：

葉・漆・漆の種・ガラス（工作部門）、「会津・漆  
の芸術祭2012 地の記憶未来へ」

喜多方市二十間蔵、2012.10.6-11.23

### 掲載写真

撮影：村上史明

クレジットの無いものは筆者撮影